

開業半年「シネマ・チュプキ・タバタ」

障害の有無にかかわらず、一緒に銀幕の世界を楽しむ「シネマ・チュプキ・タバタ」が北区に開業して約半年が過ぎた(昨年八月二十九日本紙一面でオープン前に紹介)。月替わりで新旧問わず数本を上映。視覚障害者向けに全作品で登場人物の動きや情景の「音声ガイド」を聞けるようにし、耳が不自由な人のために邦画も字幕付き。約二十席の「ユニバーサルシアター」の挑戦に、映画関係者やファンの間で、共感や支援の輪が広がる。

監督俳優ら一肌

「何なの? フェルナンド」「力なく笑うフェルナンド。ざらついたキャンパスの上に黄土色をなぞっていく。各座席のイヤホンにセッすると、吹き替えのせりふと音声ガイドが交互に聞こえてくる。

二月に上映したフランス映画「ニゼと光のアトリエ」は、一九四〇年代に実在した精神科病棟が舞台。電気ショックなど暴力的な治療に反対する女性医師が取り入れた芸術療法で、回復していく患者たちを描いた。

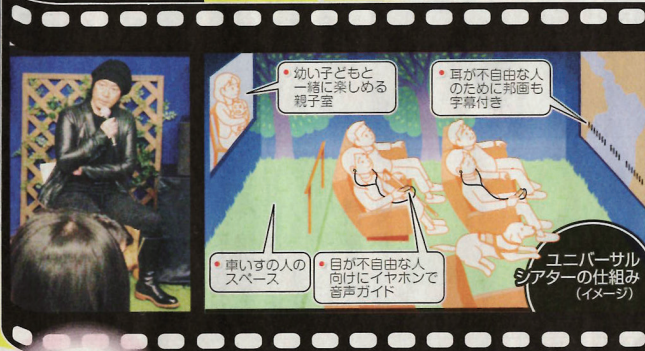
音声ガイドを手掛けた支配人の佐藤浩章さん(68)は「重いテーマに見合う言葉を探るのは、苦しい作業だった」と振り返る。吹き替えの録音には、二十人の俳優や声優らが手弁当で参加した。

佐藤さんと運営を切り盛りする代表の平塚千穂子さん(48)は、バリアフリー上映に長く取り組み、昨年九月に常設の劇場という夢をかなえた。車いすの人のスペースや、幼い子が泣いたら駆け込める親子鑑賞室も設けた。工事費など千八百万円は、五百人以上の寄付で賄った。

バリアフリー上映



①運営を切り盛りする佐藤さんと平塚さん
②舞台あいさつに訪れた樹木希林さん
③同じく永瀬正敏さん＝いずれも東京都北区の「シネマ・チュプキ・タバタ」



広がる輪

配給会社から映像の提供を受けた後、作品を何度も見ながらガイドや邦画の字幕、洋面の吹き替えを自前で用意しなければならず、準備に追われる日々だ。

「映画を見ながら思い巡らす大切な時間を取り戻せた。ガイドのおかげで目頭に映像が浮かぶ」。治療院経営の岡野宏治さん(58)は盲導犬を連れてよく訪れる。網膜色素変

紙面構成・甲斐毅

fax 03-3595-6920 email t-hatsu@tokyo-np.co.jp



2017年3月21日

映画の音声ガイド 目が不自由でもストーリーが理解できるよう情景や登場人物の動き、場面転換を、せりふや音楽の合間に説明するナレーション。新作映画の一部で、スマートフォンのアプリ「UDCast」を使って聞けるサービスが始まっている。各地の点字図書館などは、視覚障害者向けに主音声と音声ガイドをダウンロードして楽しめる「シネマ・デージー」を貸し出しており、全国で約300タイトルある。行政や市民団体によるバリアフリー上映会も広がっている。



「シネマ・チュプキ・タバタ」(北区東田端2の8の4)は、JR山手線田端駅北口から徒歩5分。問い合わせは☎電03(6240)8480へ。